



ペペライトとマンチャナイトが見られる光景

## 海の底のマグマの冷めきったペペライト

今回はちよつと変わった岩を紹介します。その名は「ペペライト」。きつとお聞きになったことのない名前だと思います。

はじめにおいしそうなご飯を想像してください。そこに黒コシヨウをかけた様子を書いてみましょう。今回ご紹介する「ペペライト」とはそんな石です。ペペはイタリア語でコシヨウのことです。あたかもご飯に黒コシヨウをふりかけたような石ですので、ペペライトと名付けられました。

（ライトは石の名前の語尾につけることが多い言葉です。）

ペペライトは水の底でできた石です。今から2〜3000万年前の、まだ八峰町が大陸の一部でしかなかった頃のことです。その頃の八峰町はおそらく浅い海でした。その海の底には、まだやわらかい砂がたまっていました。そこに高温の溶岩がやってきました。たぶん地下からやってきた溶岩は砂の中にもぐりこみます。すると砂の中の水が沸騰して、砂は渦巻くように動いてしまいます。溶岩も引きちぎられて砂の中にバラバラになって散らばっていきます。

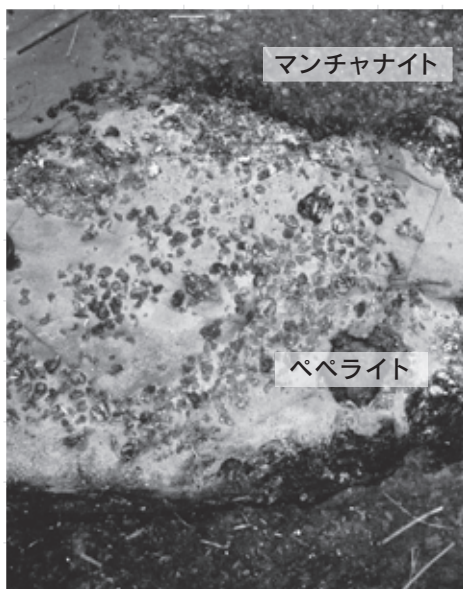
このような砂と溶岩の混じり合ったものが長い年月の間に固まって岩になったもの

が岩館海岸のペペライトなのです。

また、溶岩にもご注目ください。この溶岩の中には大きな白い鉱物が入っています。これがとても偉そうな名前なんです。その名も「シャチョウセキ」。まるで社長のすわるイスのようですね。本当は斜長石と書きますが、シャチョウセキがたくさん入っているのです。溶岩の方もまだらに見えます。このような溶岩には、第2代秋田大学学長の渡辺萬次郎先生わたなべまんじろうの名前にちなみまして「マンチャナイト」とあだながつけられています。

なお、ペペライトは、瀧安の乙女像の下の海岸で見ることができます。

秋田大学教育文化学部 教授 林 信太郎



※八峰町文化祭にて峰栄館に展示してあった岩石は「マンチャナイト」です。